

笠金村養老吉野讚歌小考

——類句「絶ゆることなく見む」の表現分析から——

中 嶋 真 也

はじめに

『万葉集』巻第六は、次の歌々で幕が開かれる。⁽¹⁾

養老七年癸亥夏五月、幸于芳野離宮時

笠朝臣金村作歌一首 并短歌

滝上之 御舟乃山尔 水枝指 四時尔生有 刀我乃樹能 弥継嗣尔 万代 如是 一夕知三 々芳野之 蜻蛉乃宮

者 神柄香 貴将 有 国柄鹿 見欲将 有 山川乎 清々 諾之神代 従 定家良思母 (九〇七)

反歌一首

毎年 如是 衰見 壯鹿 三吉野乃 清河内之 多芸津白浪 (九〇八)

山高三 白木綿花 落多芸追 滝之河内者 雖見不飽香聞 (九〇九)

或本反歌曰

神柄加 見欲賀藍 三吉野乃 滝乃河内者 雖見不飽鴨 (九二〇)
 三芳野之 秋津乃川之 万世尔 断事無 又還將見 (九二一)
 泊瀬女 造木綿花 三吉野 滝乃水沫 開来受屋 (九二二)

養老七年(七二三)五月、元正天皇の吉野行幸に際して笠金村が詠んだ歌「吉野讚歌」という呼称は『万葉集』に見られず、現代の便宜的な説明用語に過ぎないが、他にふさわしいことはも想起しにくいので、そのまま用いておく。この行幸は『続日本紀』にも確認される。吉野への行幸は文武天皇の大宝二年(七〇二)七月以来、二〇年以上の時を隔ててなされたものであった。元正天皇は翌神亀元年(七二四)二月に讓位し、聖武天皇が即位する。この養老の吉野行幸は聖武朝の実質的な開始を意味するものであったと考えられ、その折の歌から始まる巻第六は「聖武天皇治世を記念しようとして編まれた雑歌集」と捉えてよからう。⁽²⁾

なお、聖武天皇は即位後、神亀元年三月、神亀二年五月と続けて吉野へ行幸する。⁽³⁾このように即位前後に立て続けに行幸するのは、文武天皇の場合⁽⁴⁾に通じ、天武皇統の嫡流の皇位継承に欠かせない儀礼的行幸であったとされる。⁽⁵⁾そして元明・元正天皇時代に長く吉野行幸が行われなかったのは、天武皇統での男性直系である聖武の即位を待つためであったとも考えられている。⁽⁶⁾

一 評価と問題設定

金村の養老吉野讃歌は、聖武天皇の治世を記念する巻第六の巻頭歌群であり、同時代的には決して低い評価でなかったと推測される。実際、我々が万葉第三期の代表歌人として即思い浮かべる山部赤人も、巻第六には金村と同じ行幸の折の歌が収められているが、『万葉集』での掲載状況は常に金村が先である。金村が千年や赤人より当時、高い評価を得ていたと推測するのが穏やかであろう。⁷⁾ また巻第六の題詞のあり方は、金村の歌集の題詞、公的作品には精しい年時記述を持つ を基に成り立ったという推測は妥当性が高い。⁸⁾ これも金村の当代の評価の高さの傍証となる。そして年時を明記するという事実だけでなく、巻第六冒頭は金村の歌を軸に編纂されていると考えてよからう。具体的にいえば、「車持千年作歌一首 并短歌」という題詞を持つ車持千年の吉野行幸従駕歌（九二三丁九一六）は、今回取り上げる金村歌に続くが、九一六左注に「右、年月不_レ審。但以「歌類」載於「此次」焉。或本云、養老七年五月幸于芳野離宮之時作」とある。「右」の指す範囲は諸説あるが、「或本」には「養老七年五月」と記されていたわけで、もしこの記載に従っていれば、「年月不_レ審」という左注は不要になる。つまり「養老七年五月」と年月を明記した注は編纂時に第一に採用した本ではない「或本」の注であって、九一五題詞「或本反歌曰」とある「或本」に対応すると見るのが穏やかであろう。そうなること「右」は正文として考えられる九二三以下全体を指すと捉えるべきだろう。千年の歌の正確な年月は不明だが、金村の方は明確なのである。また九二三丁九二七番歌の赤人の吉野讃歌も同様に考えられる。このように金村の歌を先行させ、他の歌人の歌が並ぶという状況は、金村の歌の題詞に年月が明瞭であること

が一因ではあるうが、金村の『万葉集』編纂当時の評価の高さを物語ろう。

現存する『万葉集』に即せば、金村は当代一級の歌人であったと推定すべきだが、現在の評価は必ずしも芳しくない。例えば本稿で取り上げる養老の吉野讃歌に即して述べると、必ず先行する人麻呂の吉野讃歌（三六〇七、三八〇九）との関連で評価が下され、かろうじてよきところを探し出すという印象である。⁹⁾しかし見落とせないのは、金村は当代に高い評価を得ていたと推測されることである。何が評価されていたのか、それは具体的に残された歌の表現に即して考えるしかない。多くの先行研究に既に述べ尽くされた感もある金村だが、今なお追求すべき問題は存すると考える。本稿では金村の養老吉野讃歌を丹念に読み、当代の評価の高さの所以をささやかに探ってみたい。

二 人麻呂の吉野讃歌

金村の養老七年の吉野讃歌は、吉野行幸自体長い空白期間があることも反映しようが、『万葉集』において確認される柿本人麻呂以来の吉野讃歌である。諸論・諸注において指摘のあるように、その人麻呂の吉野讃歌が当該歌に大きく影響を及ぼしていると考えるのは自然だろう。その点の確認のため、人麻呂の吉野讃歌を眺めておく。

幸于吉野宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌

やすみしし わがおほきみの きこしをす あめのしたに くにほしも
 八隅知之 吾大王之 所聞食 天下尔 国者思毛 沢二雖有 山川之 清河内跡 御心乎 吉野乃国之
 はなぢらふ 秋津乃野辺尔 宮柱 太敷座波 百磯城乃 大宮人者 船並言 旦川渡 舟競 夕河渡 此川乃 絶

事奈久ことなく 此山乃このやまの 弥高思良珠いやたのしらす 水激みなせき 滝之宮子波たきのみやこは 見礼跡不みれどあかぬ 飽可問か (三六)

反歌

雖みれどあかぬ 見飽奴みあぬ 吉野乃河之よしののかはの 常滑乃とこなめの 絶事無久たまることなく 復またかり 還見牟みむ (三七)
 安見知之やすみし 吾大王わがおほきみ 神長柄かむながら 神佐備世須登かむさびせと 芳野川よしのがは 多芸津河内尔たぎつかふち 高殿乎たかどのを 高知座而たかしりまして 上立のほりたぎ 国見乎くにみ 為勢婆をせせは
 疊有たたまはる 青垣山あきかきやま 山神乃やまのの 奉御調等まじむつと 春部者はるべには 花挿頭持はなかざしもち 秋立者あきたては 黄葉頭刺理もみちかきせり 云黄葉加射之云黄葉加射之 逝副ゆきまがひ 川之神母かはのかみ 大御おほみ
 食尔けに 仕奉等つかへまると 上瀬尔かみせに 鵜川乎立うかへまると 下瀬尔しもせに 小網刺渡さでさしたす 山川母やまかはも 依よりて 奉流つかふる 神乃御代鴨かみのみよかも (三八)

反歌

山川毛やまかはも 因而奉流よりてつかふる 神長柄かむながら 多芸津河内尔たぎつかふち 船出為加母ふなでせすか (三九)

右、日本紀曰、三年己丑正月、天皇幸吉野宮。八月、幸吉野宮。四年庚寅二月、幸吉野宮。五月、幸吉野宮。五年辛卯正月、幸吉野宮。四月、幸吉野宮。未詳知何月從駕作歌。

二組の長反歌である。左注ではいつの行幸とは確定できないが、『万葉集』の配列から、持統三年正月から五年四月までのどれかとされる。二組が同時か否かは掲載状況からはつかめず、歌の表現の分析からも同時とする説と、異なる行幸での作とする二説にわかれている。制作時期の確定は難しいが、第一組は第二組に先行するとは考えにくい。

三六番歌は「やすみしし我が大君の聞こし食す天の下に国はしもさはにあれども山川の清き河内と御心を吉野の国の花散らぶ秋津の野辺に宮柱太敷きませば」と冒頭から、大君が吉野に宮を定めた所以を言を尽くして述べる。一方、三八番歌は「やすみしし我が大君神ながら神さびせすと吉野川激つ河内に高殿を高知りまして」と、「神ながら神さび

せすと」と大君を神格化し、吉野という場は既知のものと描いている。それは第一長反歌を読んだ上で、理解しうる表現の水準であろう。両長歌の冒頭は「やすみし我が大君」で共通するが、そこにも今の推察を裏付ける書き分けがあるように思われる。係り方未詳で「大君」の枕詞として説明される「やすみし」だが、三六番歌の表記は「八隅知之」で、三八番歌は「安見知之」で異なる。両者「知」を用いるように、シル、すなわち支配の意味合いを想定した書き方であるようだ。集中では「八隅知之」が二〇例で、ヤスミシシの表記としては最多であり、「安見知之」は六例である。異なる表記であることに關して、新編全集では「八隅知之」で「天下の隅々まで八方をお治めになる、の気持で書いた」、「安見知之」は「語源を、安らかに国を治める、の意とした筆録者の解釈を反映したもの」と解している。語源解釈の反映と捉えるのが自然であろうが、この述べ方では作者人麻呂とは別の「筆録者」が存在するかのようである。その可能性は皆無ではないが、ここに「筆録者」という新たな人物を積極的に登場させる必然はない。むしろ歌の作り手人麻呂の解釈の反映とまず第一に考えるべきでないか。三六番歌は「聞こし食す天の下に国はしもさはにあれども」と大君の支配する空間が多くあることを歌う。それは「八隅」と結び付きやすい意味合いである。一方の三八番歌では第五句に「吉野川」と前触れもなく吉野は掲出され、「八隅」である必然はない。この歌の基本姿勢と考えられる君臣和楽は、大君の「安」らかなる支配に保証されるからこそなされると受け止められよう。語源理解というより、文脈において適当な意味を想定しうる字面を選択したと考えるのが無難であろう。第一長反歌は第二長反歌に先行することは間違いないから。その上で両者の表現を検証すると、従来の研究において強調されるように、三八番歌は「神」そのものとされた大君に山の神も川の神も仕えるという歌であり、大君の偉大さを直接的に讃美している。一方、三六番歌に大君を「神」と結び付ける表現はない。讃美の直接の対象は吉野宮であるが、それを造管

したのが大君であると前に表現することで大君への讚美が表わされていることにはなる。しかし歌の表に現わされたところからは、第一組は国土讚歌の性格が強く、第二組は天皇讚歌の性格が強いという清水克彦氏の指摘は⁽¹⁰⁾見逃せない。我々は「人麻呂吉野讚歌」「天皇讚歌」と捉えがちだが、一組目と二組目に差があつて不自然でなからう。金村養老吉野讚歌の一つの評価に「全首風景の讚美なのである」(窪田評釈)があるが、それは人麻呂吉野讚歌一組目に通ずると想定しうる。ことは具体的に確認すべきである。

人麻呂の吉野の景の描写に注目しよう。一組目は山と川とが表出されている。それらが「一対の相対することはとして用いられている」⁽¹¹⁾という考え方は非常に強い支配力を持つている。確かに「山川の清き河内」や「この川の絶ゆることなくこの山のいや高知らず」は山と川とを一対に表現している。しかし後者に関して「此の山」に相当する具体的表現はこの前に見えない(和歌大系)というのは極めて自然な言である。歌の表現を素直に追えば、「ももしきの大宮人は船並めて朝川渡り船競ひ夕川渡る」「滝のみやこ」と川の側の表現に偏っているのは間違いない。そもそも「山川」としながら「清き河内」と「河内」が山がなければなしえない地形と考えられるとはいえず、川の側のことばである。⁽¹²⁾人麻呂の吉野の把握はおそらく現実の景の印象もあるうが、修辞として一対の山川を優先させるのではなく、川を主にしたものと推測される。それは大君讚美の色彩が濃い第一長歌においても、神と関わる山川を提示しながら、「吉野川激つ河内に」と川の印象は強い。さらには西反歌が一層川に即した表現であることも見落とせない。第一組の反歌に山は表われず、川に即した歌となつていのである。人麻呂が吉野を川を中心に把握したと見てよからう。また、国土讚歌の性格の強い三六番歌においても、描かれる景は「大宮所」という人工物(大君)が建造したと表現される(と、川を中心とした自然景であることも忘れてはならない。人麻呂はその両者を混然とさせるように「滝の

みやこ」という言い回しはその象徴と捉えられる。詠み込んでいる。しかも、それを「見る」として長歌はまとまる。反歌三七番歌は川だけを詠み、「見る」ことで長歌と対応を見せる。

さて、その三七番歌は金村歌との関係を考える上で、非常に大きな意味を持つ。金村の或本反歌、九二一番歌に「絶ゆることなく見む」という表現が共通するからである。次節でこの点を考えてみたい。

三 「絶ゆることなく見む」

集中「絶ゆることなく見む」という表現は次の七首の歌に確認される。

- A 卷向之まきむくの 痛足之川由あなしのかはゆ 往水之ゆくみづの 絶事無たゆることなく 又反将見またかへりみむ (一一〇〇 人麻呂歌集・非略体歌 「詠河」)
- B 雖見飽奴みれどあかぬ 吉野乃河之よしののかはの 常滑乃とこなめの 絶事無久たゆることなく 復還见牟またかへりみむ (三七 柿本人麻呂)
- C 三芳野之みよしのの 秋津乃川之あきづのかはの 万世尔よろづよに 断事無たゆることなく 又还将见またかへりみむ (九二一 笠金村)
- D 石走いはしり 多萃干流留たぎちながる 泊瀬河はつせがは 絶事無たゆることなく 亦毛来而将见またもきてみむ (九九一 紀鹿人)
- E 可多加比能かたかひの 可波能瀬伎欲久かはのせきよく 由久美豆能ゆくみづの 多由流许登奈久たゆることなく 安里我欲比见牟ありがよひみむ (四〇〇二 大伴家持)
- F 物能乃布能ものふの 夜蘇氏人毛やそうぢひと 与之努河波よしのがは 多由流许等奈久たゆることなく 都可倍追通见牟つかへつつみむ (四一〇〇 大伴家持)
- G 紅乃くれなゐの 衣尔保波之ころもにほはし 辟田河さきたがは 絶己等奈久たゆることなく 吾等眷牟われかへりみむ (四一五七 大伴家持)

推定される作歌時期の順に配列したが、金村以前には人麻呂関係の二首のみが存在する。金村が人麻呂の表現に学んだとしてよからう。さてこれらの例に共通するのは、表現「絶ゆることなく」は川の描写から導かれることである。川の流れに絶えないさまを見届け、「絶ゆることなく」と永續性を表現し、「見る」動作にかかる。観念的な時間を具体的な景を生かして表現するのは人麻呂の創始と捉えてよからう。永遠に見ようというのである。「見る」対象への讚美を表わすことになる。

さてその対象だが、どの歌にも川以外の景物は詠み込まれず、歌だけを読めば、その川を「見る」と捉えるのが自然である。しかし、諸注すべての例を、川を「見る」歌とはしていない。「絶ゆることなく」に関して統一的に言を残す新沢典子氏の「見る」対象に関する注記をまとめると、次のようになる。¹³⁾

A 「痛足川」、B 「吉野宮」、C 「吉野宮」、D 「泊瀬川」、E 「立山」、F 「吉野宮」、G 「辟田川」

川だけでなく、宮や山が登場する。歌の言外のことばが対象になっている。それはBやCがそうであるように、長歌や短歌体の歌が先行し、それを受けるように各歌が存在するゆえである。実際、Fは家持のいわゆる吉野讚歌の第二反歌である。長歌、第一反歌と続いているので、この歌は次に挙げる第一反歌との対応で理解されるようになっている。

伊尔之蔽乎 於母保須良之母 和期於保伎美 余思努乃美夜乎 安里我欲比売須 (四〇九九)

大君を主体に吉野宮を「見す」と詠む。それに続くFは臣下である八十氏人が主体であるが、「八十氏人も」と助詞

「も」があるように、大君に仕えつつ、大君と同じものを「見る」歌になっている。つまり吉野宮がその対象でよい。一首中に詠み込まれないものを読み取ることになるが、「も」を使うなど歌の中にそれを感じ取らせることばがある。しかしこの歌以外、A・E・Gの六首にはそのようなことばはなく、一首中で考えると、「見る」対象は川が自然に思えるのである。それは単独で短歌体で存在する歌の場合、そう読むことになろう。具体的にはAとDである。便宜的にDから確認しておくが、この歌は「同鹿人至泊瀬河辺作歌一首」の題詞のもとにあり、左注などはない。「同」とあるのは、前の九九〇番歌題詞に「紀朝臣鹿人跡見茂岡之松樹歌一首」とあることによる。同じ作家の別の場での歌である。Dの題詞に「泊瀬河辺」と記され、そしてそれ以外の情報はないように、歌にも明記される泊瀬川を「見る」と解される。

次にAだが、この歌は人麻呂歌集非略体歌で、表現「絶ゆることなく見む」の集中に確認される最古の例と考えられる。いわゆる巻向歌群の一首で、題詞「詠河」のもとに収められている。一般に『万葉集』巻第七の「詠」という題詞は編者の付したもので、人麻呂歌集には本来なかったと考えられている。ゆえに、この「詠河」というのも編者の解釈に過ぎず、人麻呂歌集では川を詠んだ歌のつもりではないという可能性は皆無ではない。しかしAには他の景物を詠み込むこともなく、痛足川を詠む歌で、「見る」対象もその痛足川でよからう。つまり「絶ゆることなく見む」という表現は川に導かれ、そしてその川を「見る」歌として、万葉では始まっているのである。

一つの表現が典型的に用いられるのはとかく模倣と批判されがちだが、¹⁴『万葉集』¹⁴といつのは実に多くの類句、類歌からなる歌集であって、その現状からすれば、類句を用いることで何を求めたのかを探ることが重要になろう。「絶ゆることなく見む」に即せば、川と結び付くことが共通し、原則として歌の中に川以外の景物は詠み込まれないとい

うところまで共通するのである。このように考えてみると、「見る」対象も原則は「川」と考えるのが、表現のあり方からして穏やかでなかるうか。

そこでBの人麻呂吉野讃歌を考えたい。諸注にあまり何を「見る」のか言及はないが、「絶えることなくまたやって来てこの滝の都を見よう」(伊藤稜注)とするものもある。なぜ一首の中に存在しない「滝の都」が呼び込まれるのか。それは長歌の表現に拠ったことになる。すなわち三六番歌では末尾に「この川の絶ゆることなくこの山のいや高知らすみなそそく滝のみやこは見れど飽かぬかも」とあり、結句「見れど飽かぬかも」の「見る」対象は明らかに「滝のみやこ」である。そして反歌として当の三七番歌が続く。「見れど飽かぬ吉野の川の」と始まる。長歌の結句をそのまま受け止めるようだが、「飽かぬ」と打消の助動詞連体形に「吉野の川」が直結する。長歌では「見礼跡不_レ飽可問_レ」と否定を表わす「不」を用いて表記しているが、三七番歌では「雖見飽奴」と「不」など否定を表わす漢字はなく、「ぬ」という音を示す「奴」が用いられている。「見れど飽かず」と独立させないための配慮であろう。つまり確実に第二句「吉野の川」に「見れど飽かぬ」がかかると読ませるわけである。第一句の「見る」対象は明らかに吉野川である。長歌の「滝のみやこ」とずれているのである。そこから「常滑の絶ゆることなくまたかへり見む」と続き、一首は終わる。「絶ゆることなく」は長歌にも見られるところであった。結句にある二度目の「見る」の対象は、一首の表現からは吉野川以外の何ものでもない。つまり長歌と反歌とで、「見る」の対象が異なるのである。その所以を解くことは本稿の主とするところではないが、人麻呂の意識としては吉野の景を永続的に見ることを意志として歌うことが、大君を讃美するということにつながると捉えていたと推測するに留めておく。そして吉野の景を宮という人工物と川という自然物とで捉えているのである。第一組の「見る」対象は長歌では人工物の宮で、反歌では自然物の川に

なっている。このように人麻呂の時点で、長歌と反歌との間のずれ
 が存在したことを認めた上で、金村の吉野讃歌の分析に入る。

四 九〇七番歌の分析

「滝の上の三船の山に」と始まる。「川」が詠まれないこの冒頭表現は「み吉野の秋津の宮は」と「宮」に集約される。その間には「山に」ある木を生かした永続性の表現がある。「みづ枝さしじに生ひたるとがの木」と続く。まつ科の常緑樹「とがの木」の若々しい枝が伸び広がり、一面ぎっしりと繁茂しているさまである。それは目に入る景の描写と考えられるが、「しじに」に注意したい。ここは原文表記「四時尔」とある。熟語「四時」には一年における「四時」(つまり四季)と一日における「四時」(朝・昼・夕・夜)と二通りの意味がある。ここでは空間的な描写の中に以下の「万代に」という時間的永続性との関わりを感じ取るのでよからうが、いつの季節も隙間なく生えている枯れない植物の像をも想起させる。集中「しじに」が「四時」の表記であるのは当該歌の他一例しかない。⁽¹⁵⁾ 金村の表記意識を無視すべきではなからう。⁽¹⁶⁾ 空間の表現に表記で時間を感じさせたのである。そのような「とがの木」が類音から「いや継ぎ継ぎに」を起し、「万代にかくし知らさむ」と何代にわたって天皇が統治してゆくさまを詠む。今上元正のみならず来たるべき聖武の統治をも感じ取らせるのである。

「とがの木」は集中一例しかないが、「つがの木」に同じと考えられる(吉井全注は当該例を「つがの木」と訓む)。
 「つがの木」は集中四例あり、うち三例が「いや継ぎ継ぎに」を起す序になっている。⁽¹⁷⁾ 赤人の例、当該例との先後関

係は問題になるところだが、人麻呂近江荒都歌（二九）との関連は間違いないだろう。該当箇所は「生れましし神のことごとつがの木のいや継ぎ継ぎに天の下知らしめししを」となっており、過去の統治の描写である。金村はこの人麻呂の表現を「将来にかけていうことに転換⁽¹⁹⁾」し、人麻呂よりも「巧妙な叙述⁽²⁰⁾」と評価されている。

人麻呂の影響を受け、ただし直接、吉野讃歌ではない。表現された統治の場所は「み吉野の秋津の宮」と提示される。集中唯一の「秋津の宮」の例で、「秋津」は正確にはどこを指すのか不明だが、人麻呂三七番歌に既に見られた。人麻呂は「秋津の野辺に宮柱太敷きませば」と詠み、「秋津」は宮の所在地である。「秋津の宮」という表現は「離宮が敵として既に存在していることを前提⁽²¹⁾」と把握されるが、それは当該金村歌がここで人麻呂の吉野讃歌と明瞭に深く関わってくることを感じ取らせるのである。

その「秋津の宮」に「神からか貴くあるらむ国からか見が欲しからむ」と続く。「神」と「国」との対句で、「その物にそなわっている本来の性格」（時代別）を意味する名詞「から」を伴っている。「見」があるが、その対象は「秋津の宮」である。さて「神からか／＼国からか／＼」の対句は、人麻呂の狭々嶋の歌（二二〇）に先例「国からか見れども飽かぬ神からかここた貴き」があり、その影響下にあると多くの注に述べられる。もっとも清水克彦氏が指摘するように⁽²²⁾、人麻呂からの直線的な影響ではなく、人麻呂も影響を受けたと考えられる『琴歌譜』一一の歌謡「そらみつ日本の国は神からか住みか欲しき在りが欲しき国は蜻蛉州日本⁽²³⁾」も考慮に入れる必要があるかもしれない。「あき／＼」との関わりは感じさせるが、金村は当該歌において「見る」動作を重視している。『琴歌譜』歌謡に「見る」はなく人麻呂歌には存在する。このような状況を踏まえると、やはり人麻呂歌の影響を見届けてよからう。さてその「神」だが、「国」との対比であって、人麻呂歌においても金村歌においても、国つ神・土地の神のよ

うなものを想起するのが穏やかであろう。しかし九〇七番歌には「神代」としてもう一度「神」が表われる。両者がどのような意味合いなのか問題がある。この点後述する。

宮の文脈の中に自然物に関する「山川を清みさやけみ」が入りこむ。現在の定訓「清みさやけみ」は実は本居宣長の門人柴田常昭の思いつきに過ぎないもので、今なお追求すべき課題なのだが、本稿では通説に従っておく。その三語法は、「つべし神代ゆ定めけらしも」と宮が吉野に定められた根拠として機能する。「つべ」と納得する金村が登場する。「神代ゆ」定めたことを金村が確認したわけである。ここで「神代」ということばで「神」が詠み込まれる。先の「神」とどのような差があるのか、それとも同じものを考えるべきなのか、検証してみたい。

吉井巖氏は次のように述べる。

金村の作における神代は、神々の時代一般の神代ではなく、持統天皇を神とし（三三八）、持統天皇の御代を神の御代と歌った（三三六）人麻呂の表現を受けて、金村は、その神代の宮殿造営もつべなるかなと讃嘆していると解さなければならぬのである。⁽²⁶⁾

人麻呂の吉野讃歌を背後に置いて、持統天皇の代を「神代」と捉えている。人麻呂歌と金村歌の関係を考えれば、首肯すべき把握である。もつとも三六番歌において人麻呂は「持統天皇の御代を神の御代」とは詠んでおらず、そこは誤読である。しかし当該歌との関係で無視できないのは、三六番歌において持統天皇が吉野の宮の造営者として描かれているという事実である。つまり人麻呂の三六番歌から導き出せる宮造営者としての持統天皇、三八番歌から読み取れる神としての持統天皇、その分けてあった二つの像を金村は一つにして「神代ゆ定めけらしも」と詠んだと考えられる。もちろん吉野という地に関して天武天皇の存在は無視できない。⁽²⁷⁾しかし歌の表現の水準では、人麻呂が別々

の歌で開いた吉野宮造管者としての持統、そして神としての持統という様相を享受した金村が一つに表現したと捉えるのが穏やかであろう。

「神代」が持統天皇の代を指すと考えると、「神」＝持統天皇と金村は把握していたことになろうが、先の「国」と対句の「神」も持統を指すことになるのであろうか。この点に関して先の言に続いて吉井氏は次のように述べる。

「この」神から」の神は、国土の神を主とした意味であろうが、なお人麻呂の吉野讃歌（三八）を背景においた場合、山の神、川の神が、春秋の景を美しく飾り、川の幸を御食として貢献した表現によって、神である持統天皇の姿を裏面に揺曳させているといえよう。

「国土の神」を第一義に置きつつ、三八番歌を踏まえ「神」ということばに持統天皇を見よつとしている。「神からか貴くあるらむ」と宮の貴さを讃える文脈での「神」であって、宮の造管者を揺曳させているという把握は魅力的である。しかし歌中の「神」を考える上で三八番歌の存在は大きいはずである。ここでは明らかに「種類の「神」が詠まれている。一つは「神ながら神さびせず」と詠まれる持統天皇そのものを指す「神」で、もう一つは「山神」「川の神」である。後者の動作には「まつる」「つかへまつる」が用いられ、持統天皇の「神」に仕える立場であることが明確に示されている。そして歌はそのような状況を「神の御代」と捉えた感動で終える。最後の「神の御代」は明らかに持統天皇の代を指す。人麻呂は明らかに大別して「種類の神を使い分けている。おそらく金村はその点を正確に把握し、九〇七番歌において利用したと思われる。最初の方は「国からか」と対にすることで国つ神的な神を想定させ、後者は宮を定めた「神代」と時期を限定することで、持統天皇を思い起こさせたと読むべきであろう。推測をめぐらせば、「定め」の主体を「神」とするようには詠まずに、「神代ゆ」と「代」を含めたのは、三八番歌の「神の御

代」を直接的に受け、つまり持統天皇の代であることを示す、金村なりの工夫と見てよいのではなからうか。金村も二種の「神」を用いたのである。

だが金村は「神」をこの歌群全体で強調するつもりはないだろう。なぜなら長歌において見られた「神」も以下の或本反歌の一首に見られるのみだからである。それは金村の時代に「神」というものへの観念が後退していたからのように捉えるのではなく、人麻呂の表現を受け止めたがためと考える。金村は人麻呂の開いた二種の「神」を読み取り、歌中の表現によって捉えられるよう、自らの歌に生かした。それでは模倣や継承という評価以上のものはないようにも見えてしまう。しかし二つの持統像を一つに捉え返すのは、金村の新たな営為として認めるべきであろう。金村が人麻呂吉野讃歌を強く意識し、そこから新たな企てを試みたと思しき形跡は長歌に続く短歌体の歌々を見渡すことで、より確実に浮かび上がってくるように思われる。次節以降それらを確認する。

五 反歌二首、九〇八・九〇九番歌の分析

正本反歌第一首目は「年のはにかくも見てしか」と、毎年このように見たいという希望が述べられる。何を見たいのであろうか。長歌の「見が欲しからむ」をそのまま受けるのであれば、離宮がその対象となるが、この反歌では異なる。下二句「み吉野の清き河内の激つ白波」で繰り広げられるように、吉野川（具体的なことは「白波」である。「見る」対象は、長歌が宮で、反歌が川であることになる。それは先に推察した人麻呂吉野讃歌一組目に同じである。つまり長反歌の構成も人麻呂に学んだと見てよいだろう）。

次の九〇九番歌は第一句三語法「山高み」から始まる。この句を新編全集のように、第二丁四句で示される「滝の河内」との並列と捉える解釈もあるが、第三句「落ち激つ」に示される激しく流れ落ちる滝の感覚は「山高み」に原因を求めるのが穏やかであろう。山川の対比というより、山は川の添え物のような印象を抱かせる表現である。それは人麻呂以来の川に偏る吉野描写から見れば自然な感覚であろう。「白木綿花」という白い木綿で作った造花を比喻に白さを強調する水の流れは、「滝の河内は見れど飽かぬかも」という結びにつながる。「見れど飽かぬ」は人麻呂吉野讃歌に依拠した表現であろう。「見る」対象は「滝の河内」であって、前歌九〇八同様、宮ではなく川の方である。

正本反歌はともに川を見る歌である。それは人麻呂三七番歌を継承したものであろう。模倣に終わっていないのは、一つは両者に「白」を強調したことに求められようか。白波と「見る」を共存させる歌が万葉には数多くないという指摘もあり、斬新な感覚の表われでもあろう。「白」に何らかの靈性を見届けうる可能性は皆無ではないが、おそらく現実の吉野の景の中でとりわけ「白」に印象が残ったというのが第一であろう。人麻呂吉野讃歌とも長歌九〇七とも異なり、「明確な焦点をもつ景」が描かれているという神野志隆光氏の言は金村の新たな営為として評価すべき点と思われる。また白木綿という人工の物を基準に、「滝の河内」という自然美を強調したという清水克彦氏の指摘も見逃せない。それは人麻呂の開いた宮と川という人工物と自然物との単純な対比の水準から、両者を生かした比喻表現をなしたという点で、さらなる進歩を遂げたといえるだろう。

六 或本反歌、九一〇～九一二番歌の分析

「反歌二首」の後に、「或本反歌曰」として歌三首が並べられる。テキストのあり方から、先の「反歌二首」が九〇七番歌に対する正本反歌であることは間違いない。「或本反歌」の方は「或本」とされる別の本『万葉集』編纂時点か、それ以前かは定かではない。に残された歌だが、「反歌」と明記されているように、ある時点において九〇七番歌に対する反歌として認識されていたことを示す。「反歌二首」と「或本反歌」との関係がどのようなものなのか、考察すべき点だが、それは後に触れるとして、まずは「反歌」とされる以上、長歌との対応を意識して読み進めることが必要とされよう。

九一〇番歌上二句「神からか見が欲しからむ」は、長歌の「神からか貴くあるらむ国からか見が欲しからむ」と対応することは読み取りやすい。しかしこの表現の源泉の一と考えられる人麻呂歌でも「神」「見る」関係ではなく、バランスの悪さは否めない。さて何を見たいのであろうか。それは下二句に述べられる。「み吉野の滝の河内は見れど飽かぬかも」と、讚美表現「見れど飽かぬかも」が用いられる。ここにも「見る」があり、一首中、二度「見る」が用いられるのは人麻呂三七番歌に通じ、また「見る」対象は「滝の河内」となっており、長歌の「見る」対象「宮」とは異なり、ここにも人麻呂を受け継いだ様相が確認される。もっともあまりに人麻呂歌の先例から外れていないという判定も下しうる。なお、この歌、正文反歌九〇九の下二句と共通するが、正文反歌にはない「神」が詠み込まれている。長歌の表現に拠ると素直に捉えれば、この「神」は土地の神を想定してよいことになるが、このままでは金

村なりに意図して用いた、長歌の「神」と「神代」の差異が曖昧になりかねないのである。

続く九一二番歌は、第三章でことした「絶ゆることなく見む」の表現を持つ歌である。その「見る」の対象は、この歌自体の表現、ならびに類句の様相からすると、歌中の「み吉野の秋津の川」でよからう。ここにも人麻呂吉野讃歌の長反歌の枠組みがそのまま生かされていることが確認される。しかし諸注の批判があるように、この歌自体、あまりに人麻呂三七番歌に通ずる表現になっているのも事実である。

九一二番歌は今まで見てきた歌とは趣を異にする。「泊瀬女^{はしせめ}が造る木綿花」と泊瀬に住む女が造る木綿花と詠まれる。泊瀬は、現在の奈良県桜井市初瀬^{はせ}の一带を指し、吉野とはかなり距離がある。「泊瀬女」があまりに唐突で、「木綿花」もこの歌では熟さない印象である。以下に「み吉野の滝の水沫に咲きにけらずや」と続き、造花に過ぎないものが「咲く」と関わらせたまもしろさは認められるが、それを結び付ける「白」の側面はこの歌には明瞭にされず 九〇九番歌との異なり、現場においては十分かもしれないが、書かれた歌として享受するには焦点が十分でない。また泊瀬女に関しても、行幸に何らか関わったのであろうが、やはり唐突である。この歌に関して梶川信行氏は長歌とは「まったく無関係な独立した短歌」と把握し、その上で「泊瀬女の造る木綿花」がああ吉野の滝の水の飛沫のよつに『咲きにけらずや』と理解するのである⁽³¹⁾と述べる。「独立した短歌」という把握は興味深い。この歌の一連の歌群の中での異質な感覚は、視覚的把握であるのは間違いないが、「見る」ことの希望や意志を述べていない歌になっていることにも確認される。この事実は軽くなからう。金村なりに「見る」ことへの志向を歌にする構成・統合の意図があるのなら、この九一二番歌が正文反歌に採択されないのである。九一二番歌は本来長歌九〇七の反歌として作られたのではなく、行幸に従駕していたと思われる泊瀬女⁽³²⁾の存在などを意識した即興的な歌 泊瀬と吉野の距

離感からして戯れ歌的なものであつたのかも知れない。⁽³²⁾
 独立した印象のある九二番歌だが、現行の『万葉集』では、「或本」であれ、金村の吉野讃歌に対する「反歌」として収められている。また九〇八番歌は九二番歌にやや似通い、九〇九番歌は九一〇番歌と九二番歌を整合させたかのようになっている。ここで「或本反歌」について考察しておく。

七 「或本反歌」について

「或本反歌」に関しては、

「或本」とは云ふが、傳唱の結果小異を生じたといふ性質の物ではなく、金村が後になつて、反歌だけを新に詠み變へたので、「或本」の方はそれが傳はつてゐたのかと思はれる。⁽³³⁾ (窪田評釈)

という理解もあるが、「或本」を正文反歌の初案とする伊藤博氏の解釈が現在主流である。「或本反歌の前二首はほとんどの詞句発想を人麻呂に受けたもので、金村の加えたものは皆無に近い」(吉井全注)というように、金村の創意という観点から見て、窪田評釈のような説は考えにくく、推敲の結果が「反歌二首」として収められていると捉えるのが穏やかであろう。なお伊藤氏は「或本反歌」が先に成立し、そこから長歌を構想したという説も述べるが、吉井全注などの批判もするように、根拠薄弱である。

この推敲説に基本的に従つてよからうが、どうしても残つてしまつのが九二番歌である。伊藤氏も、この歌が反歌として適切でないという把握から、推敲さらには或本反歌から長歌へという論が立てられている。その点をどのよ

うに捉えるべきであろうか。

注意したいのは、笠金村は集中に長歌を多く詠み、それに対する反歌も残すことである。それらに構成意図が読み取れるとしたのは山崎馨氏だが、氏は金村の反歌は「二首を標準とする」と指摘する。事実、金村歌において、この「或本反歌」以外三首の反歌を残した例は見られない。つまり金村という歌人を考えるときに、反歌三首になっていることにまず疑いをもってよいのではないか。想定を述べよう。九〇七・九一〇・九一一番歌という一組の長反歌があり、九一二は戯れ歌的に別個に存在した。長歌九〇七と反歌九一〇・九一一は宮讚美（宮を見る）と川讚美（川を見る）との差異があり、人麻呂吉野讚歌第一長反歌の表現性に通ずる。しかし九〇七番歌は先に述べたように、人麻呂に学びながら、人麻呂の讚歌の表現とは別のものを用いて新たな讚歌を作るのに対し、反歌はあまりに人麻呂吉野讚歌に近い表現になってしまっている。特に九一一番歌において「絶ゆることなく見む」を用いるなどその傾向は著しい。また長歌との整合性を求めたのであろうが、九一〇番歌は表現として未熟になってしまった。その点を回復するためある面、歌人金村自身のプライドのため 新たな反歌が要請されたのではないか。そこにおそらく当意即妙でありながら、そこそこに評判の高かったと思われる木綿花を水の泡に見立てた歌、九一二の存在があつたのであろう。そこを生かして長歌との整合性のために、「泊瀬女」は消し去り、九一〇番歌を含みこむように新たに九〇九番歌を作成したのではないだろうか。九〇八番歌は川を見る願望を歌い、意志を詠む九一一番歌と微妙な差異を有し、かつ長歌とは密接に結びつき、一方で次の「白」「たぎつ」といったことばを使うことで、正文反歌二首、九〇八番歌と九〇九番歌同士の関係はより明瞭に強固になる。作り手の側にそのような構成意図があつたと考えてよからう。テキストの問題としては、「反歌一首」に対し「或本反歌」に過ぎない。「或本」の反歌が三首並ぶ形であつたかどうかは定か

ではないのである。同じことは次の車持千年の歌に関してもいえるのである。そちらは正文が一首に対し、「或本反歌曰」に二首掲出される。必ずしも歌の数が合つわけではない。伊藤説のように、長歌の前にまず或本反歌三首があるのではなく、長歌と或本反歌として収められる一首が元来の長反歌の組み合わせであろう。本来別のものではあった、九一二番歌を取り込むことで、新たな長反歌が構成されたと思われる。編纂時、もしくは編纂以前のある時点で、正本反歌との類似から「或本」とされる本の「反歌」として九一二もそこに含まれたのではなからうか。

人麻呂の意図を継承し、それでいて人麻呂の讃歌を直接には模倣しないという金村の表現としての新しさの追求が確認されるのである。吉井全注では長歌の焦点は「吉野の宮の讃嘆」にあり、人麻呂吉野讃歌との対比で「間接的」な大君の讃歌になったと評価する。しかし吉野宮讃美は人麻呂吉野讃歌の第一長反歌に確認できるところである。宮をほめることはその造管者を讃美することであり、金村はその意図を見事に継承しつつ、「大君」を明記しなかったり、即神表現を採用しなかったりする新たな天皇讃歌をなしたといえよう。そのような直接的な表現がないことから、「間接的」と捉えるのはある面的を得ているが、金村の姿勢は強い天皇讃美にほかならないのである。そうでなければ、聖武治世を記念する巻六の巻頭を飾るまい。その営みが同時代において高く評価されたことを物語るであろう。歌人金村は自身の営みに自信を深め、従来の表現を生かしながら変え、根本の思想　天皇讃美　は決して変えない歌を編み出すに至るのである。それが神龜二年の金村吉野讃歌（九二〇～九三二）である。³⁵

おわりに

金村の養老時の吉野讃歌の表現を分析してきた。人麻呂に学びながら、単なる模倣ではないことがつかめる。金村の評価というのは、類歌・類句を当然のものとして受け止める、当時の歌を制作する状況を踏まえてなされるべきものである。そのような中で金村は決して伝統を軽視することもなく、それでいてかなり挑戦的に表現上の試みをなしていたと見られる。それが巻第六に見られる同時代での高い評価を生む要因で、金村は当代屈指の新しい歌人であったと思われる。

なお「絶ゆることなく見む」を用いた、家持の二例(E・G)に関しては、詳しく取り上げられなかったが、両者、川を「見る」歌として読める。特にEは「立山賦」で、多くの注で山を「見る」歌としているが、類句の持つ意味、そして歌そのものの表現からして川を「見る」歌と捉えるのが穏やかである。

「絶ゆることなく見む」の表現は川と結び付き、基本的にはその川を「見る」表現なのであった。例外となるFは「も」という助詞によって大君と臣下との対比を生かして、新たな歌を家持がなしたと見られる。それが吉野讃歌であることは、家持が人麻呂や金村といった歌人の吉野讃歌を強く意識し、その表現を採択しつつ、新たな意味合いを生かそうとした試みと判断されよう。

注

- (1) 本稿における『万葉集』の引用は基本的に小学館新編日本古典文学全集に拠る。
- (2) 吉井巖『万葉集全注』巻第六「概説」(有斐閣 一九八四年九月)。
- (3) 神亀二年五月の吉野行幸は『続日本紀』に確認されないが、『万葉集』巻第六、九二〇番歌の題詞「神亀二年乙丑夏五月、幸_二于吉野離宮_一時、笠朝臣金村作歌一首 并短歌」に基づく。
- (4) 持統天皇はその十一年(六九七)四月に吉野へ行幸し、同年八月に讓位する。即位した文武天皇は大宝元年(七〇一)二月、大宝二年七月に吉野へ行幸する。聖武の場合に比べ、即位前と後とで、やや間を置くという事実はある。
- (5) 注2前掲吉井論文。
- (6) 小野寛『万葉集従駕歌の一つの問題』『国語国文論集』(学習院女子短期大学国語国文学会)第八号(一九七九年三月)。
- (7) 金村の優位性に関しては、古く風巻景次郎「山部赤人(上・下)」「萬葉集大成」第九・十卷(平凡社 一九五三年六月・一九五四年五月)に「氏族そのものへの評価」(十卷所収)の反映とし、伊藤博「吉野の赤人たち」『万葉集の歌人と作品』下(塙書房 一九七五年七月、初出『言語と文芸』四一号、一九六五年七月)も従う。しかし根拠は弱く、「やはり歌人としての当代宮廷における評価にもとづくもの」(身崎寿「笠金村論」『セミナー万葉の歌人と作品』第六卷、和泉書院 二〇〇〇年一月)という前提から考えるべきである。
- (8) 吉井巖『万葉集巻六について 題詞を中心とした考察』『万葉集研究』第十集(塙書房 一九八一年一〇月)。
- (9) 例えば「此の作も人麿に比すれば見劣りするのでは致方ない。一通り要領を得ているのも模倣の常である。破綻なく一首を纏め上げたといふのが作者の功績であらう」(土屋文明『万葉集私注』)、「従来から言われて来たように、確かにこの長歌のできばえはあまり良いものとはいえない」(梶川信行「人麻呂から金村へ 吉野讃歌をめぐって」『万葉史の論』笠金村、桜楓社 一九八七年一〇月、初出・近畿大学教養部『研究紀要』十九巻一号、一九八七年八月)。
- (10) 清水克彦『吉野讃歌』柿本人麻呂 作品研究 (風間書房 一九六五年一〇月、初出『日本文学』三七号、一九五六年一月)。
- (11) 井手至『萬葉びとの』ことばとこころ 新潮日本古典集成『万葉集』五・解説(一九八四年九月)。

- (12) 窪田空穂『万葉集評釈』では、「河内」ということばに関して、通説の「河の彎曲した所」だけでなく、「河の流れその物」と捉える可能性を述べる。カハウチの略と考えると、河の中、すなわち流れを指す場合もあったと見てよいのではなからうか。
- (13) 新沢典子「大伴家持の吉野讃歌と聖武天皇詔」『万葉』一八四号（二〇〇三年七月）。
- (14) 金村への批判はおおむねその点から始まる。身崎寿氏はその姿勢を鋭く批判する。ただし身崎氏は「継承」に意義を見出すところだが、新たな企ても金村には見られるというのが私見である。参照、注7前掲身崎論文。
- (15) その歌は丹比笠麻呂が筑紫国に下る際、妹との別れを悲しむ歌（五〇九）。「しじに」は「家の島荒磯の上につちなびきしに生ひたるなのりそがなとかも妹に告らず来にけむ」と「なのりそ」の生える描写に用いられている。金村歌ほど構成は明瞭でもなく、単に宛て字なのかもしれないが、「朝なきに夕なきに」の対句が前にあり、一日での「四時」を暗示し、日中悔いる丹比笠麻呂の思いをも感じ取らせる。丹比笠麻呂は詳細不明の歌人であり、金村との先後関係はつかめない。
- (16) 吉井巖氏は金村独自の題詞のあり方から、「作者みずからが記述して公表した」と断する（注8前掲吉井論文）。吉井氏は題詞に着眼したわけだが、題詞のみが記述で歌は口頭とは考えにくく、金村を考察する上で歌の表記は注意すべきである。
- (17) 二九（柿本人麻呂）、三三四（山部赤人）、四〇〇六（大伴家持）、四二六六（大伴家持）の四例のうち、四〇〇六以外が「いや継ぎ継ぎに」を導く。
- (18) 神野志隆光「金村の養老七年芳野行幸歌『セミナー万葉の歌人と作品』第六卷（和泉書院 二〇〇〇年二月）に、的確な整理・批判がなされる。
- (19) 注18前掲神野志論文。
- (20) 注7前掲身崎論文。
- (21) 遠藤宏「赤人の吉野讃歌 特に九二六・九二七番歌について」『論集上代文学』第十一冊（笠間書院 一九八一年六月）。後に、日本文学研究大成『万葉集』（国書刊行会 二〇〇三年一月）にも収められる。
- (22) 清水克彦「養老の吉野讃歌」『萬葉論集 第二』（桜楓社 一九八〇年五月）初出。境田教授喜寿記念論文集 上代の文学と言語。前田書店 一九七四年二月。
- (23) 『琴歌譜』の引用は岩波日本古典文学大系『古代歌謡集』（一九五七年七月）に拠る。
- (24) 小野寛「山川乎清濁」考』『万葉の風土・文学』（塙書房 一九九五年六月）に訓の状況に関して詳説される。

- (25) 神野志隆光氏は『万葉代匠記（精撰本）』の「スガスカシミの訓の可能性を述べる。しかし神野志氏も述べるように、スガスカシは心と関わることで、山川に直結させることには問題が残る。参照、注18前掲神野志論文。
- (26) 注8前掲吉井論文。
- (27) 神野志隆光氏は赤人・家持をも視野に入れた聖武朝の歌人たちの「神代」を天武天皇に帰す（注18前掲神野志論文）。また鉄野昌弘氏は当該歌群に「見る」ことが繰り返し詠まれることに着眼し、天武作歌「よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき人よく見」（二七）に根源を持つと指摘する（『万葉百五十首を読む』別冊國文學『万葉集を読むための基礎百科』学燈社、二〇〇二年一月）。しかし家持と金村・赤人に全く共通の把握があると断ずるには慎重であるべきだろうし、また「見る」に関しては既に人麻呂吉野讃歌（特に第一組）に強調されるところであって、金村が直接に天武歌の影響で吉野を「見る」対象として把握したとも述べにくい。
- (28) 岡内弘子「白波を『見てしか』と歌うこと」巻六・九〇八番の歌。『香川大学国文研究』第二〇号（一九九五年九月）。
- (29) 注18前掲神野志論文。
- (30) 注22前掲清水論文。
- (31) 注9前掲梶川論文。
- (32) 清水克彦氏は金村歌には「旅先の女性への接近の意欲を示すものがはなはだ多い」と理解し、九二二番歌を「このような享樂的精神の所産」と推定する。単純に「享樂的」と押さえることには慎重でありたいが、そのような歌を残している事実を鑑みると、旅と女性の関係は金村において一つのモチーフであることは留意してよからう。参照、注22前掲清水論文。
- (33) 伊藤博「第一人者の宿命」『万葉集の歌人と作品』下（塙書房、一九七五年七月、初出『日本文学』一九卷一二号、一九七〇年二月）。
- (34) 山崎馨「笠金村と車持千年」『萬葉集講座』第六卷（有精堂、一九七二年二月）。山崎氏はこの「或本反歌」を金村の反歌分析の俎上には載せない。正文ではないがための一つの見識であろう。
- (35) 拙稿「笠金村吉野讃歌の方法」九二〇～九二二番歌を中心に、『美夫君志』第六三号（二〇〇一年一月）において、金村が大君讚美を前面に出さずにそれを感じ取らせる表現を試みた点を述べた。

（なかじま・しんやノ本学専任講師）